

初年次教育の現状と課題

A 大学社会福祉学科一年次アンケートから(2)

原 田 奈津子¹⁾, 高 島 恭 子¹⁾, 黒 山 竜 太¹⁾, 井 上 美 代 子¹⁾
熊 谷 賢 哉²⁾, 石 倉 健 二³⁾

(¹⁾長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科
²⁾長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科
³⁾兵庫教育大学大学院 臨床・健康教育学系)

要 旨

本稿では、本学における初年次教育のあり方を模索するために、学生の大学生活への適応を支援するための基礎的知見を獲得することを目的として、社会福祉学科一年次生を対象に、大学生活への適応を把握するための調査を2年間(2007年から2008年度)に渡って実施した。調査の結果から、受け身の姿勢を持つ学生が多く見られることから、教職員が理解したうえで学生の「育ち」を支援する必要性が示唆された。

キーワード

初年次教育、大学生活、適応

1. はじめに

「導入教育」や「初年次教育(First Year Experiences)」など高等教育の比較的早い時期における教育プログラムについての議論が、日本国内においては大学教育学会を中心として活発に議論がなされてきた。2008年には「初年次教育学会」も設立され、議論はますます深さと広さを増してきている。

また、2008年12月の中教審「学士力」答申では、初年次教育の学士課程教育の中での位置づけが初めて明確化された。その2008年に中教審答申で初年次教育について言及したのが、「学士課程教育の構築に向けて」の中であり、答申では、初年次教育を「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的に作られた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と定義している。このように初年次教育への取組みは緊急かつ重大な問題で、社会的にも大きなテーマ

となっている状況がうかがえる。

私たち人間社会学部社会福祉学科初年次教育研究会では、このような状況の中、2006年度より学科共同研究費を受けながら、本学科において必要な初年次教育のあり方について検討してきた。2006年度は初年次教育に関する日本及びアメリカでの先行研究のレビューを行い、2007年度は日本の初年次教育の先駆的な研究を行ってきた濱名や山田ら(2004)の「ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究」における調査をもとに、一年次生への調査を行った。その調査の結果、大学生活への適応に関して、4月から7月までの最初の三ヶ月間における変化が非常に顕著であり、この期間において学生をどのように支援していくかが初年次教育の大きな分岐点であることが示唆された。よって、今回、2008年度では、新生に調査を行うにあたり、調査票における調査項目の精査と、さらに2007年度新生の調査結果との比較を中心に調査を行った。そこで初年次教育における学生支援のあり方についての基礎的な

知見の積み重ねをし、今後の具体的な初年次教育プログラムの開発を目指すこととする。

2. 方法

対象

A 大学社会福祉学科2008年度1年生の57名を対象とした。

調査の時期

2008年の4月・7月・10月・1月の4回にわたって行った。

調査の方法

1年生の必修科目である「教養セミナー」の時間に、担当教員を通じて調査の目的や解答方法について説明を行い配布し、即時あるいは1週間以内に回収した。

解答用紙には学籍番号の記入を求め、各回での個人の回答の対応が取れるようにしたが、入力には教養セミナー担当教員以外の者によって行われ、入力後のデータは学籍番号とは異なる整理番号を用いることにより、個人が特定できないようにした。

調査の内容

調査票は、2007年度に行った質問項目に倣って作成された。大学1年生の大学への適応に関わる先行研究の中から調査項目を取り出し、さらにA大学社会福祉学科として必要と考えられる項目を加え編集して作成された。調査内容は、①学習の適応状態、②対人関係上の適応状態、③生活全般の適応状態、及び④父母の学歴、⑤学内外の諸活動への参加状況、⑥大学生活についての実感、⑦福祉を学びきっかけ、⑧将来についての考え、⑨高校(大学入学前)での学習や生活の状況、⑩大学での今の様子、⑪自分自身についての考え、⑫大学での勉強、⑬大学での勉強習慣、大学での学生生活面、の総計108項目となった。ただし、4月のみ行った項目(④、⑨)や時期に合わせての項目(試験の

準備の仕方など)など、回ごとに若干の増減がある。

質問項目は、「1. そうである」から「4. そうではない」までの4件法で回答を求めた。

回収率

4月調査 回収 52名(回収率91%)

7月調査 回収 46名(回収率81%)

10月調査 回収 46名(回収率81%)

1月調査 回収 49名(回収率86%)

3. 結果及び考察

(1) 2008年度1年生の傾向

4月、7月、10月、1月の4回すべてにおいて質問項目として含まれた、『大学での学習』に関する24項目、『自分や人との付き合い方』に関する11項目、『学生生活』に関する15項目の計50項目について、得点の分布の違いの有無をクラスカル・ウォリスの検定によって判定した。このうち、有意傾向のあるものを含め、有意な差が得られたのは『大学での学習』に関する12項目、『学生生活』に関する6項目の計18項目であった(表1)。『自分や人との付き合い方』に関する質問項目では、有意な差のあるものは見られなかった。

この18項目について多重比較を行ったところ、「アルバイトが忙しくて勉強ができない」と感じる、「授業が難しいと感じる」、「起床・就寝時間など規則正しい生活をするようにしている」など9項目において、4月/7月に差がみられた。

また「アルバイトが忙しくて勉強ができない」と感じる、「授業が退屈だと感じる」、「授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している」、「授業で配布された資料(プリント)を整理するようにしている」、「授業によく遅刻する」、「憂うつで気分の落ち込みを感じる」など9項目においては、4月/10月に差がみられた。このうちの5項目では4月/7月でも差が見られたものであった。

表1 クラスカル・ウォリスの検定により4、7、10、1月に有意差のあった質問項目

** : 1%有意、* : 5%有意

分類	質問項目	判定	多重比較	平均
大学での学習	授業が長くて困ったと感じる	*	なし	
	ノートの取り方に困ったと感じる	**	4/10月**、10/1月*	4月>10月<1月
	「アルバイトが忙しくて勉強ができない」と感じる	*	4/7月*、4/10月*、4/1月*	4月>7、10、1月
	授業が難しいと感じる	*	4/7月*	4月>7月
	授業が退屈だと感じる	*	4/10月*	4月>10月
	板書されたことをノートに書くようにしている	**	7/1月*	7月<1月
	授業中に携帯メールをよくしている	**	4/7月**、4/10月**、4/1月**	4月>7、10、1月
	授業にどの程度出席するかで困ったと感じる	**	4/7月**	4月>7月
	授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している	**	4/7月**、4/10月**、4/1月**	4月>7、10、1月
	図書館の利用方法や文献の調べ方がわかる	**	4/7月**、4/1月**	4月>7、1月
	授業で配布された資料(プリント)を整理するようにしている	*	4/10月*、4/1月*	4月<10、1月
	現在、学習面はうまくいっていると感じる	*	なし	
	学生生活	起床・就寝時間など規則正しい生活をするようにしている	**	4/7月*、4/1月**
授業によく遅刻する		**	4/7月**、4/10月*、4/1月**	4月>7、10、1月
授業をよくさぼる		**	4/7月**、4/10月**、4/1月**	4月>7、10、1月
大学周辺の店や施設などについて理解することができた		*	4/1月*	4月>1月
憂うつで気分の落ち込みを感じる		*	4/10月*	4月>10月
現在、生活全般はうまくいっていると感じる		*	なし	

「アルバイトが忙しくて勉強ができない」と感じる」、「授業で配布された資料(プリント)を整理するようにしている」、「大学周辺の店や施設などについて理解することができた」などの9項目において、4月/1月に差がみられた。このうち7項目は4月/7月でも差がみられたもので、1項目は4月/10月でも差がみられたものであった。

その他には、7月/1月で「板書されたことをノートに書くようにしている」に差がみられ、10月/1月で「ノートの取り方に困ったと感じる」に差がみられた。

こうしたことより、2008年度1年生においてもこれまでの調査と同様に、4月の状態が他の時期と異なり、その変化は7月までに起きていることが示唆され、4月から7月までの3~4ヶ月間の教育的支援が重要であることが確認された。

4月は他の時期に比べ、「ノートの取り方に困ったと感じる」、「アルバイトが忙しくて勉強ができない」と感じる、「授業が難しい」、「授業が退屈だと感じる」について、否定的である。

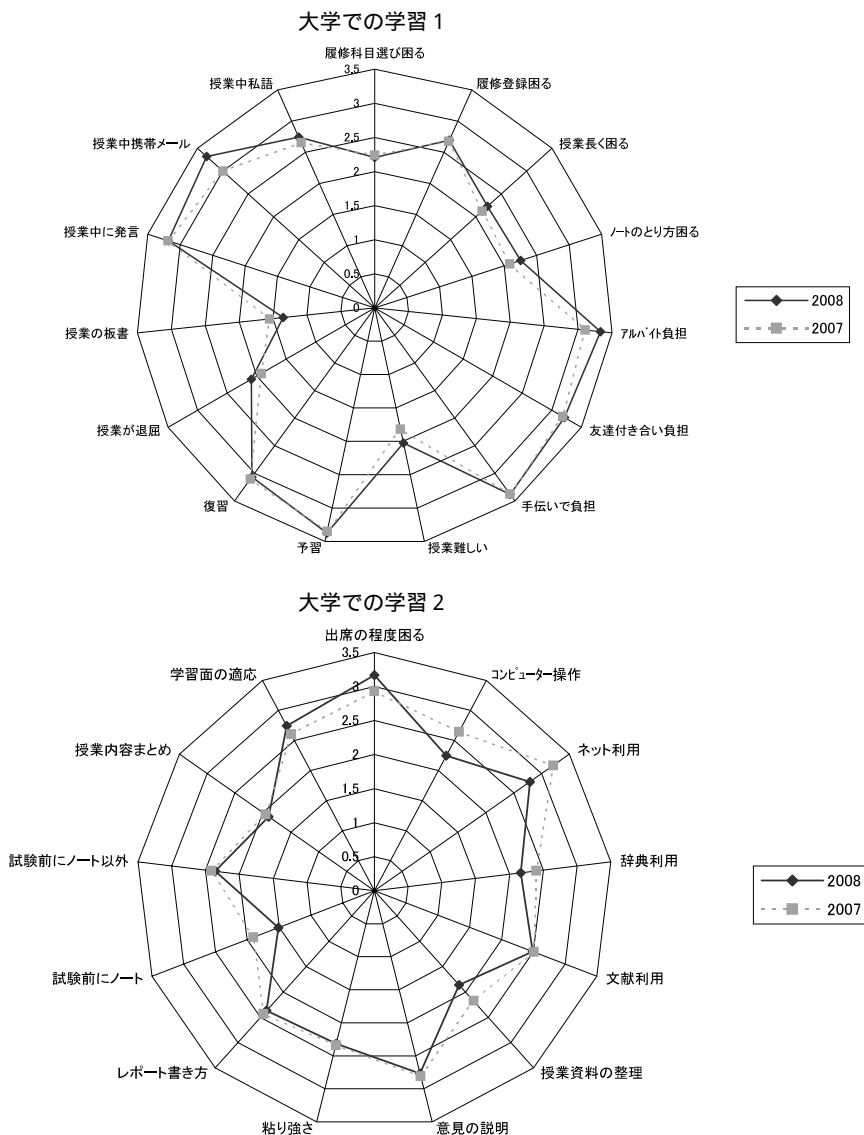
「授業中に携帯メールをよくしている」、「授業によく遅刻する」、「授業をよくさぼる」についても否定的である。「授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している」、「図書館の利用方法や文献の調べ方がわかる」についても否定的である。また「授業で配布された資料(プリント)を整理するようにしている」、「起床・就寝時間など規則正しい生活をするようにしている」は他の時期に比べ肯定的である。こうしたことから、ノートの取り方や大学の授業での上手な学び方、アルバイトの調整や生活リズムの作り方などについてアドバイスや支援が必要とされると考えられる。

(2) 全質問項目における2007年度1年生との平均の差の検定

『大学での学習』に関する28項目、『自分や人との付き合い方』に関する11項目、『学生生活』に関する15項目の計54項目について、2007年度1年生（以下07年度生とする）と2008年度1年生（以下08年度生とする）との得点をt検定によって比較した（図）。このうち、有意傾向のあるものを含め、有意な差が得られたのは10項目であった。（表2）

『大学での学習』について、コンピュータを

操作できる インターネットを利用する について有意な差が見られたことについて、特に07年度生の平均点は2.5を上回っている（どちらかといえば否定している）のに対し08年度生は2.5を下回っている（どちらかといえば肯定している）。このことから、07年度生は08年度生に比べコンピュータの扱いに苦手意識を感じている可能性が考えられる。一方、授業中の携帯メール についてどちらの年度の学生も「使わない」傾向で回答しているものの、08年度生は07年度生に比べ有意に「使わない」ことがわ



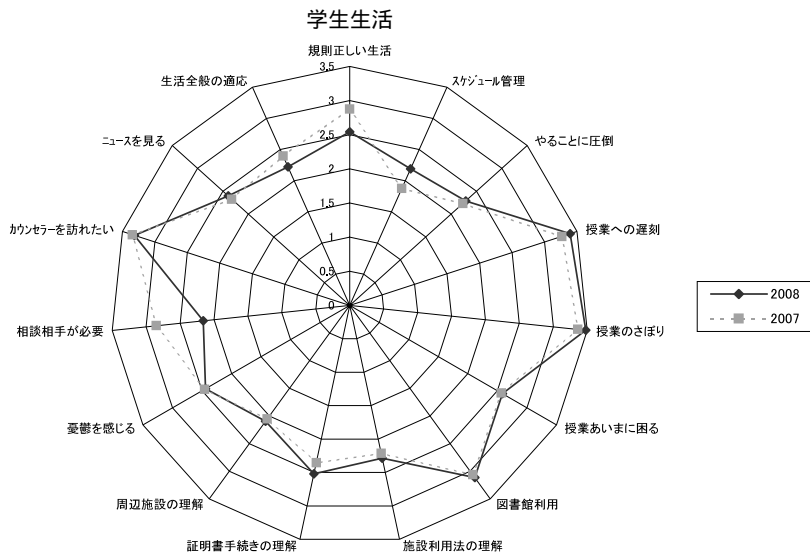
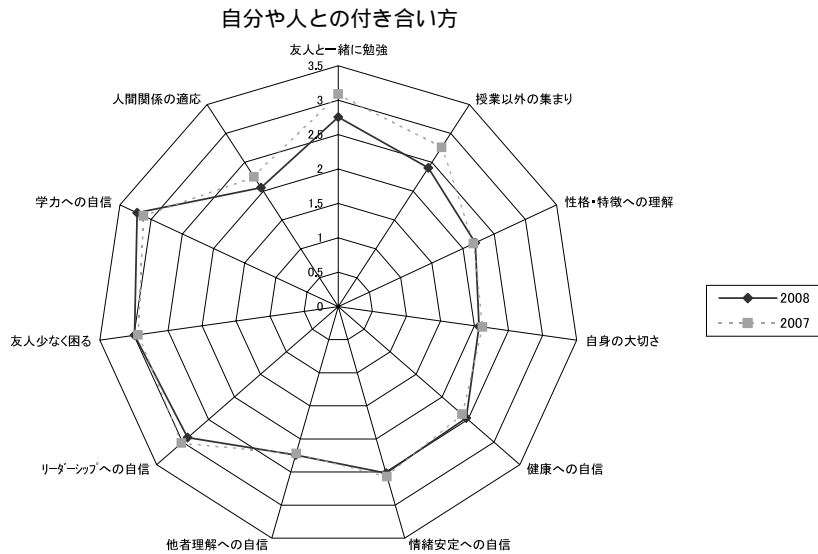


表2 t検定により07年度生と08年度生の間に有意差のあった質問項目

分類	質問項目	07年度生*	08年度生*	t	df	有意水準
大学での学習	授業中に携帯メールをよくしている	3.00(0.73)	3.32(0.56)	2.55	105	p < .05
	授業にどの程度出席するかで困ったと感じる	2.93(0.68)	3.16(0.62)	1.87	105	p < .10
	必要に応じてコンピュータを操作することができる	2.64(0.80)	2.25(0.88)	-2.45	105	p < .05
	授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している	3.21(0.63)	2.79(0.85)	-2.89	97	p < .01
	授業で配布された資料を整理するようにしている	2.18(0.79)	1.86(0.70)	-2.21	105	p < .05
	試験前には授業のノートを見直した	1.90(0.91)	1.51(0.80)	-2.33	101	p < .05
自分や人との付き合い方	授業以外の時間にある授業やゼミの集まりに参加するようにしている	2.76(0.66)	2.40(0.73)	-2.64	104	p < .01
	現在、人間関係はうまくいっていると感じる	2.25(0.61)	2.06(0.57)	-1.68	105	p < .10
学生生活	悩み事を相談できる相手が必要だと感じる	2.85(0.89)	2.16(0.74)	-4.38	105	p < .001
	現在、生活全般はうまくいっていると感じる	2.40(0.57)	2.22(0.53)	-1.67	105	p < .10

* 数値は平均値、()内は標準偏差

かった。さらに、授業ノートの見直し について08年度生は有意に強く意識して行っていることがわかった。これらより、08年度生は07年度生に比べ、コンピュータなどの使用を効果的に利用しながら、授業に積極的に取り組む姿勢を示していることがうかがえた。

また、『自分や人との付き合い方』について、授業以外の授業やゼミの集まりへの参加 が平均の2.5を隔てて07年度生と08年度生の間に有意差が見られた。また、人間関係はうまくいっていると感じる という項目についても有意傾向が認められた。これらだけで一概に提言することは難しいが、08年度生は比較的積極的に交友関係を築こうとしている可能性がうかがえた。

そして『学生生活』に関する項目では、生活全般はうまくいっていると感じる が有意傾向を認め、08年度生のほうが07年度生に比べ生活に安定を感じる傾向にあることが見て取れた。一方、悩み事を相談できる相手が必要だと感じる では、08年度生の方が有意に肯定する結果となった。これらから、08年度生は生活についての適応感を感じる上で比較的相談相手を欲していることがうかがえた。

以上より、08年度生は07年度生に比べ、授業や友人関係作りへの取り組みは積極的であり、かつ生活への適応感を感じており、その上で相談しあえる相手の必要性を感じていることが見て取れた。

ただし、07年度生と08年度生に共通して見られた懸念点として、学習面における予習復習の意識の低さ、図書館利用意識の低さ、学力やリーダーシップをとることへの自信のなさが見受けられた。こうした結果を鑑みると、自分から学びとったり集団を先導したりしようとする積極的に行っているとは言い難く、どちらかといえば受身的に「やるべき」と感じている学生が多いと言わざるを得ないであろう。また、両年度生においてもカウンセラーの利用意識は低く、こうした初年次大学生の姿勢に対して教職員が理解

したうえで学生の「育ち」を支援する必要性が示唆された。

4. まとめと今後の課題

昨年度の調査結果とあわせてさらに今年の調査結果によって、初年次教育における具体的なプログラム開発に向けた多くの示唆を得ることができた。

2008年度初年次生についても、昨年度同様やはり4月から7月までの間における変化がみられ、その間の教育的な支援のあり方の重要性が明らかになった。高校でのある程度決まったスケジュールをこなす規則正しい生活から、大学での自分で履修を考えスケジュールを立てていく自由度の高い生活へいかにスムーズに移行しうるのが、大学での学び方のみならず、アルバイトの調整や生活リズムについてのアドバイスや支援も必要とされている。

また、2007年度と2008年度の調査結果の比較から、2008年度初年次生は、2007年度初年次生に比べて、授業などについて積極的な姿勢や、生活での適応感を持ってはいるものの、相談しあえる相手の不足が課題として浮かび上がっている。両年度で共通してみられる懸案は、初年次生の主体性の問題である。ある程度の指示があったことについては動けるが、自ら進んで行うといった姿勢や態度には疑問符がつくのが現状である。よって、学生の大学生活における適応について、学生の自主性をいかに形成するかという点について支援をしていくことが必要となる。

調査によってもたらされた結果をもとに、今後は本学科における具体的な初年次教育プログラム開発が課題となる。今回の調査においては、時期ごとの介入はせずに現状把握に焦点を絞ったことから、今後はどのようにプログラムを立て実践していくか具体的な取り組みを検証していく必要がある。

初年次教育は先駆的なアメリカでの取り組みをもとに、日本においても各大学で実践されつ

つある。

初年次教育における定番として、「スチューデント・ソーシャルスキル」・「学習スキル」・「情報資源活用スキル」が挙げられる。スチューデント・ソーシャルスキルは「学生生活における時間管理や学習習慣の組織化」「将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけ」「学問や大学教育全般に対する動機づけ」「受講態度や礼儀・マナーの涵養」「社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観の育成」等の学生生活や社会生活を過ごす上での基本的なスキルである。学習スキルとは、「レポート・論文の書き方などの文章作成法」「読解・文献講読の方法」「論理的思考力や問題発見・解決能力の向上」等の大学での学問や学習を遂行していく上での基本的なスキルをさす。情報資源活用スキルでは、パソコンなどのさまざまなツールのみならず、図書館などの施設の利用によって情報を収集し、そこで取捨選択をし、活用をしていくスキルを指す。

初年次教育は、従来の大学教育のあり方と大きく異なり、ユニバーサル段階における学生の質の変化によってもたらされた教育の有り様である。また、初年次教育は、単なるその場での個別支援を意味するものではなく、次の段階につなげるためのあくまでも教育である。よって、「スチューデント・ソーシャルスキル」・「学習スキル」・「情報資源活用スキル」を中心にプログラムを組み立て、初年次のうちに学生がそれらのスキルを主体的に身につけ、以後の大学生活や卒業後の社会生活へ向けて、自らの力で適応しうるように「育ち」を支援していくことが必要であろう。

2008年12月の中教審「学士力」答申では、初年次教育の学士課程教育の中での位置づけが初めて明確化され、初年次教育を「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と定義していることから、大学でのトータルな視点での取り組みが求められている。つまり、初年次教育プログラムの具体的な開発や展開にあたっては、大学における教職員全体での意識の共有と対応が求められているといえる。

附 記

本稿は、2008年度における長崎国際大学社会福祉学科共同研究によって行われた研究の報告である。なお、昨年度まで山岸利次氏（宮城大学）が重要な役割を果たして下さっていたことに感謝したい。

文 献

- (1) 濱名篤他『ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究』文部省科学研究費(2001 - 2003)報告書
- (2) 山田礼子他(2005)『私立大学における一年次教育の実際』私学高等教育研究叢書
- (3) M. トロウ(1976)『高学歴社会の大学 - エリートからマスへ -』東京大学出版会
- (4) 濱名篤(2004)「大学生にとっての円滑な移行」『大学教育学会誌』第26巻第1号
- (5) 山田礼子(2005)「第6章 日本における一年次(導入)教育」『一年次(導入)教育の日米比較』東信堂
- (6) 初年次教育学会第2回大会実行委員会(2009)『初年次教育学会第2回大会発表要旨集』